

にいがた 畜産協会たより

公益社団法人
新潟県畜産協会

新潟市西区山田字堤付2310-15
全農にいがた第2ビル内
TEL. 025-234-6781
～6783



県立加茂農林高等学校
動物コース3年生のみなさん



県立高田農業高等学校
畜産科学コース3年生(豚班)
のみなさんと先生

目次

- ◆特集 若い力が畜産の安全・安心を支える！
畜産安心ブランド生産農場となった農業高校取材しました
- 県立加茂農林高等学校
生産技術科 動物コース…………… (2)
- 県立高田農業高等学校
生物資源科 畜産科学コース…………… (3)
- ◆「養豚農場PRRS撲滅対策支援事業」
がスタートします！…………… (4)
- ◆平成28年度畜産経営改善指導結果 …… (5)
- ◆平成28年度優秀畜産表彰・
畜産経営セミナー開催 …… (6)
- ◆畜産安心ブランド生産農場交流会開催
～新たに7農場に認定証を交付～… (6)
- ◆声のコーナー…………… (7)
「より良い経営を」
酪農経営：十日町市 水落 高浩
「牛」
酪農経営：佐渡市 本間 友樹
- ◆畜産安心ブランド生産農場だより…………… (8)
佐渡市：株式会社 佐渡島黒ファーム
- ◆平成30年度採用の正規職員を募集します。… (8)
- ◆Facebookで情報発信しています！ …… (8)

当協会が認定する「畜産安心ブランド生産農場」は258農場、うち2つは

農業高校だからこそできることを実践

県立加茂農林高等学校 生産技術科 動物コース

加茂農林の概要

加茂市神明町にある新潟県立加茂農林高等学校は、明治36年から続く歴史と伝統を持ち、様々な専攻コースを備える学校です。田上町にある川船農場では牛、豚、鶏を飼養し、1年生全クラスと動物コースの2・3年生が交代で担当しています。

農業高校だからこそできることを実践

加茂農林では、「農業高校でしかできないこと」を積極的に行ってほしいと、牛のお産などの日々の家畜の世話から卵などの畜産物販売まで、全ての工程に生徒が携わるように指導しています。生徒も家畜のために何ができるかを考え、効率的に動けるよ



大切な商品を衛生的に仕分け

うな飼養管理の改善や、家畜の発育などの生産性の改善に自主的に取り組んでいます。

工夫を取り入れた消費者との交流

消費者との交流も農業高校ならではの取組であり、生徒の自主性が活かされています。消費者の畜産理解を深めるために見学者の受け入れを行っており、年に数回、地元の幼稚園児や小学生が見学を訪れ、生徒が説明役を務めます。また、定期的に卵の訪問販売を行っており、その行き先は生徒がその日の天気や地域イベントの有無などを下調べしながら人が集まりそうな場所へ販売に向きます。



農場見学では、手作りの着ぐるみでお出迎え

安全・安心を届ける認定農場

加茂農林は、県内の高校では初めて畜産安心ブランド生産農場に認定された学校です。平成24年度にクリーンエッグを、翌年度にはビーフ、ポーク、チキンの認定を取得しました。認定農場として、卵の販売時には認定シールを貼ってPRしていますが、特に力を入れているのが生徒への教育です。HACCPの考えに基づく家畜の衛生管理手法を取り入れた農場として、「最終的に食品となるものは良い環境で飼う」との方針から、衛生管理の重要性、大切さを指導し、消費者に安全・安心な畜産物を届けられるよう、日々工夫や改善を取り入れながら家畜にとって一番良い飼養環境を整えています。



畜舎の床や壁はもちろん、動物も毎日きれいに

今後の取組

加茂農林では、消費者に安全・安心を届ける学校の活動をPRしつつ、畜産物販売や農場見学等、地域と関わる取組を大事にしていきたいとのことです。同時に、畜産には厳しい衛生管理が必要であることを農場見学等の機会を通して消費者に伝えていきたいと考えています。

畜産の教育現場に認定農場の考えを取り入れた先駆けである加茂農林高等学校と生徒のみなさんの今後の活躍がとても楽しみです。

認定農場となった農業高校を取材しました

農業高校です。家畜の飼育や畜産物の販売を学ぶ教育現場の取組を紹介します。

高校生が生産者として考える



県立高田農業高等学校 生物資源科 畜産科学コース

高田農高の概要

上越市東城町にある新潟県立高田農業高等学校は、明治32年に創立された新潟県農業教育発祥の地と言われる歴史と伝統のある学校です。学内では牛、豚、鶏などを飼養し、主な管理は休日も含め畜産科学コースのみなさん18名が担当しています。

本物と身近に接する学びの環境

高田農高の特長は、校内に全ての農業施設があることです。これにより、家畜の分娩などの急な出来事にも生徒はすぐ駆けつけることができ、また、獣医師が訪れた際も、教室での授業を中断して、畜舎で診察や治療の様子を見学することができます。このように、教室と現場が近いことから、「本物を見る」機会が多くあり、生徒が畜産現場と密接に関わることができる教育環境となっています。

生産者の意識を持って家畜を管理

生徒が能動的に家畜と関わるのも特長の一つです。「生徒であり生産者である」という指導方針の下、家畜の基本的な管理は生徒に任されており、日々の観察や給餌などの世話はもちろん、現場での課題を発見して、その改善策を考えるのも生徒の役割になっています。実際に生徒が問題点を指摘して改善した例もあり、「生産者目線で自ら飼養管理を考える」ことで、より深く畜産を学んでいます。また、こまめに家畜と接していることから動物たちが人慣れしており、上越家畜市場の購買者から「おとなしく扱いやすい」と好評を得ています。



愛情込めて世話しているので、動物と仲良し

畜産安心ブランド生産農場に認定

生徒が畜産と関わる中で、昨年度、大きな目標を掲げました。畜産安心ブランド生産農場（クリーンポーク）に認定されることです。食品の安全・安心が重視される今、学校を通じた畜産物の安全・安心の発信やHACCPの必要性の周知などを行いたいと、認定取得を決めました。認定条件の一つである毎日の詳細な家畜観察や課題解決への意見交換などを行い、認定取得に向けて懸命に取り組みました。その結果、平成28年12月15日に、県内農業高校では2番目となる畜産安心ブランド生産農場の認定を取得しました。



毎日、生徒が責任を持って管理

今後の取組

育てた豚は農協経由で出荷・精肉加工し、文化祭等の学校行事で販売しています。畜産安心ブランド生産農場となった今後は、豚肉販売時に認定マークのシール貼付やチラシ配布などにより、畜産物の安全・安心をPRし、生徒や購入者の口コミ、新聞や地元テレビなどのマスコミを通して、認定農場であることを広めていきたいとの考えもあるそうです。

新しいステータスを得て、生徒たちの畜産に対する思いや活動にも幅ができるのではないのでしょうか。高田農業高等学校と生徒のみなさんの活躍に期待します。



養豚班のみなさんと育てた子豚たち

国内初

豚繁殖・呼吸器症候群(PRRS)をワクチンを用いた新たな撲滅対策を確立

～「養豚農場PRRS撲滅対策支援事業」スタートします！～

――平成29～31年度新規事業――

1 PRRSとは



肺炎となった感染子豚

- ・養豚で最も被害の大きいウイルス病
- ・母豚は流産、子豚は肺炎、死亡
- ・農場からの撲滅が非常に困難
- ・県内の推定被害額 年間 3億円



国内初・ワクチンを用いた新たな撲滅方法を確立

2 撲滅方法



口腔液で各農場の感染時期を把握

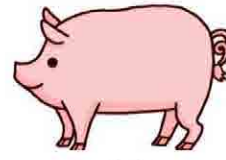
ウイルス



感染前にワクチン



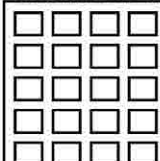
- ・2年間継続
- ・ウイルス消滅
- ・ワクチン中止→撲滅



発育良好

3 事業の流れ

動薬販売業者



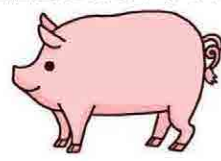
指示書の発行

・指示書に基づくワクチン販売



獣医師

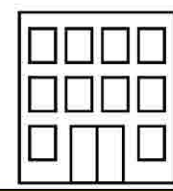
生産者によるワクチン接種



生産者

- ・領収書
- ・接種頭数の証書
- ・分娩、離乳頭数等の生産頭数の報告

家保經由



事業主体
新潟県畜産協会

ワクチン費1/2補助

4 事業計画

(1)事業名

- 養豚農場PRRS撲滅対策支援事業
- ・事業主体(公社)新潟県畜産協会
- ・内容 : ワクチン費1/2補助



(2)事業内容

- ・陽性36農場(母豚4,400頭)で肥育豚に2年間ワクチン接種
- ・実施期間を2期設定し、対象農場を振り分ける
- ・1次(H29～30年度)22農場、二次(H30～31年度)14農場

(3)事業計画

年度	対象農場	予算額(補助額)	ワクチン接種頭数
H29	22	7,700千円	55,000頭
H30	36	15,000千円	107,142頭
H31	14	7,300千円	52,142頭

平成28年度畜産経営改善指導実施結果

平成28年度の畜産経営改善指導（通称：畜産コンサル）を行い、酪農経営10戸、肉用牛繁殖経営2戸、肉用牛肥育経営2戸、養豚経営8戸の技術及び経営成績の平均を県指標値と比較し、改善点等を整理しました。詳細は当協会ホームページに掲載しております。

【酪農経営】

経産牛平均分娩間隔は16.6ヶ月と長く、最も好成績の事例でも14.1ヶ月（指標値14ヶ月以内）でした。分娩間隔の長期化は、分娩後の初回種付の受胎率が低い事に加え、受胎に要する種付回数が多いことが主要因となっているので、分娩後50～70日の観察を徹底し、適期に人工授精する必要があります。

経産牛1頭当り産乳量は、指標値の9,500kgを達成した事例が1戸のみでした。乳量が少ない事例の改善対策として、適期種付けによる分娩間隔の短縮、乳房炎の発生防止が挙げられます。

（集計戸数：10戸）

区 分	単位	28年度	指標値
経産牛平均産歴	産	2.7	3.5以上
経産牛平均分娩間隔	ヶ月	16.6	14以内
経産牛平均種付回数	回	3.0	2以内
経産牛1頭当り産乳量	kg	8,738	9,500以上
体細胞数	千個	291	160以下
所得率	%	15.0	15以上

【肉用牛繁殖経営】

全体的にはほぼ指標値を達成していましたが、発情兆候が弱く分娩間隔の延長に繋がっている繁殖牛が見られるので、発情観察の強化が必要です。また、子牛では増体の悪い個体が見られ、分娩後の飼養管理に加え、妊娠中の母牛の栄養管理の改善も必要となります。

（集計戸数：2戸）

区 分	単位	28年度	指標値
平均産歴	産	6.0	7以上
平均種付回数	回	1.7	1.5以下
平均分娩間隔	ヶ月	12.1	12以下

子牛事故率	%	6.3	3以下
雌子牛日齢体重	kg	0.97	0.96以上
雄子牛日齢体重	kg	1.07	1.09以上
所得率	%	46.0	30以上

【肉用牛肥育経営】

出荷月齢の指標値（28ヶ月以内）を達成した事例はなく、改善が必要です。肥育期間の長期化は事故リスクに加え生産コストの増加にも繋がるので、牛の状態を見ながら、肥育前期における飼料の増給や飼養環境の改善などにより増体量を向上させ、早期の出荷を図る必要があります。

（集計戸数：2戸）

区 分	単位	28年度	指標値
去勢牛出荷月齢	ヶ月	29.7	28以内
去勢牛1日当り増体量	kg	0.81	0.85以上
枝肉格付4等級以上率	%	86.2	80以上
事故率	%	1.1	2以下
所得率	%	23.4	6以上

【養豚経営】

離乳時育成率（指標値90%以上）を達成したのは2事例と少なく、離乳時育成率が低い事例では、高産歴による産子生時体重のバラツキによって虚弱子豚が死亡するほか、施設の老朽化による寒冷及び暑熱対策不足が事故を引き起こす要因となっていましたので、適正な産歴に保つための計画的な母豚の更新、施設の修繕などが必要です。

離乳から受胎平均日数の指標値（12日以内）を達成したのは1事例のみでした。離乳後の発情再起が遅れていることが主要因なので、授乳期の母豚が栄養不足にならないよう管理する必要があります。

（集計戸数：8戸）

区 分	単位	28年度	指標値
1腹当り分娩頭数	頭	13.0	12以上
1腹当り離乳頭数	頭	10.0	9.9以上
離乳時育成率	%	85.3	90以上
離乳から受胎平均日数	日	21.7	12以内
所得率	%	13.6	10以上

平成28年度優秀畜産表彰・畜産経営セミナー開催

2月7日、全農にいがた県本部ビルで、担い手の確保や生産性の向上及び経営基盤の強化を図り、経営の維持・発展に資することを目的として、優秀畜産表彰（主催：畜産協会、後援：新潟県、JA全農にいがた）及び畜産経営セミナー（主催：畜産協会）を開催しました。

優秀畜産表彰式では、養豚経営の近藤畜産（代表：近藤武雄氏 新潟市北区）に畜産協会長賞、県知事賞、全農県本部長賞が授与されました。

近藤畜産は、肉豚・子豚の出荷に加え、自家ブランド「甘豚」を商標登録し精肉の加工販売を行っているほか、「甘豚」を提供するカフェレストランの経営など、家族一丸となって多様な分野を展開しています。近藤畜産の経営概況等は当協会のホームページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。



賞状を授与される近藤畜産 近藤氏（右）

また、優秀事例から学ぶ経営管理技術では、平成27年度全国優良畜産経営管理技術発表会で農林水産省生産局長賞を受賞した、肉用牛肥育経営の安達牧場（代表：安達政弘氏 茨城県笠間市）が、「高度な管理で臨む常陸牛生産～肥育牛経営の経済的損失を考える～」と題し、自身の経営や取り組みについて発表を行いました。



発表する安達氏

今回のセミナーでは80人を超える農家や関係者から参加があり、参加者からのアンケートでは、回答者のほぼ全員から「参考になった」との回答をいただきました。

畜産安心ブランド生産農場交流会開催 ～新たに7農場に認定証を交付～

2月22日、全農にいがた県本部ビルにおいて、認定農場、認定委員会委員、関係機関・団体等60名の出席で、平成28年度畜産安心ブランド生産農場交流会を開催しました。

認証式では、畜産安心ブランド認定委員会の楠原征治委員長から、認定申請のあった乳用牛3、肉用牛2、養豚2、計7農場について、全ての農場が認定の基準に適合して認定を決定したこと、これらの農場では生産性・生産物の品質向上に努力していること、そして、これからの発展が期待できるとの審査講評がありました。

阿部専務理事から各農場代表者に認定証が手渡された後、認定農場の代表として江部毅さんが「今後一層、安全・安心な畜産物の提供に努める」旨の心強い決意表明がなされました。

続いて交流会に移り、「安全・安心な畜産物を提供するための生産現場での取り組みと今後の展開について」をテーマとして、「農場HACCPと農場HACCP導入事例（神奈川県）」を農場HACCP認証協議会の萩原茂紀主任審査員から、「会社が存続する仕組みとして導入した農場HACCPの取組事例（茨城県）」を森久保薬品株式会社赤池洋主任審査員からご講演願ひ、それぞれの経営におけるHACCP導入の意義と経営的な効果について説明がなされました。また、この取組はJGAPにつながるとの紹介も講師からありました。会場から導入メリットや継続意欲の保持等について、多くの質問が寄せられ、活発な交流会となりました。

現在の認定農場数は下表のとおり、本事業が開始されて11年目の昨年以降、県内畜産農家の半数以上となりました。

認定農場数と認定率						(平成28年12月31日現在)
畜種	乳用牛	肉用牛	豚	採卵鶏	肉用鶏	合計
農場数	86	75	57	22	18	258
(%)	(39)	(66)	(52)	(54)	(82)	(51)

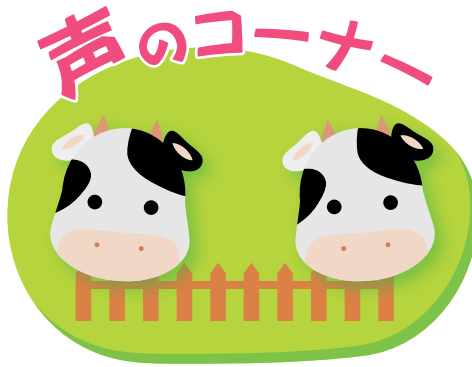


認証された生産者の皆さん



酪農経営

十日町市東下組
水落 高浩



酪農経営

佐渡市徳和
本間 友樹



『より良い経営を』

私は新潟県農業大学校を卒業後、就農して今年で3年目になります。私の家は酪農と少しですが水稻を営んでいるため農業大学校では、複合経営を考え水稻を学びました。そのため酪農の仕事は一から学んでいます。幼い頃から、たまに仕事の手伝いをしていましたが就農をして毎日仕事をするようになって改めて酪農の大変さを実感しました。もちろん今まで手伝いでやっていた仕事もありましたが初めてする仕事も多くあり、当初は慣れるまで毎日グッタリしていました。特に重機に乗って牛フンを片付ける作業は今まで全くやった事のなかった作業だったので、とても難しくなれるのに時間が掛かりました。学生時代に父がこの作業をしているのを見ていた時は簡単そうに見えていましたが、実際に自分でこの作業をやってみると牛フンを思うようにダンプに積む事ができなかったり、狭い場所での切り返しが上手いかななど思っていた以上に苦労しました。

現在、私は父と一緒に仕事をする事が多いですが、その時も自分との差を強く感じます。父は牛に起きた変化を見逃す事なく気付きます。また設備が壊れた時も可能な限り自分で工夫して直すなど、やれる事は全て対応しています。当初に比べれば私も牛の変化に多少は気付く事ができるようになりましたし、設備の修繕も簡単な物であれば直す事ができるようになりました。しかし、まだまだ自分の力不足を感じます。特に牛の変化に気付くために注意して観察したいと思います。人工授精師の資格を取得しに行った際の講義で種付けのタイミングが良くないと種がとまる確率が低い事を学び、発情が始まったタイミングを知る事の重要性をとて強く感じたからです。なので、いつかは父のように牛の出している変化を見逃さずに気づけるようになり、父に追いつきたいと思います。今はまだまだ力不足な事ばかりですが、今まで父が学んできた経営を維持し、よりよくなるように、研修会や若手酪農家との意見交換などに積極的に参加する事により、多くの知識や技術を学びたいと思います。

『牛』

佐渡ヶ島の南部、赤泊地区の実家にて酪農業に就農し2年目となりました。農業大学校を卒業後、農機の整備士や飲食業を経ての就農です。幼い頃から牛が中心の生活。その生活は子供の頃の私には魅力的には映りませんでした。小さな牛舎で自分の何倍も大きい動物が、みごとに整頓され繋がれ生活をしている光景に違和感を受けていました。体の小さな両親がいつか押し潰されるのではないかと子供心にヒヤヒヤしていた事を思い出します。

幼い頃は酪農業から自分自身を遠ざけていた私ですが、大学時代に出会った同世代の酪農家の方々や農機具メーカー時代にお取引させて頂いた多くの酪農家のお客様、そして飲食業時代には多くの食材に触れエンドユーザーであるお客様に全国の農家様の想いを届ける仕事ことができました。多くの時間を費やし少しずつ、幼い頃違和感を抱いていた酪農業に興味をそそられていきました。1次産業の厳しさは知っているつもりでいましたが、いざ就農してからその「つもり」に押し潰されそうになる事も数多くありました。

体と心が徐々に環境に適応し始め、この自然環境豊かな佐渡ヶ島でどんな酪農家になりたいのか、どんな仕事をして生きてゆきたいのか、日々生きる仕事の中で想う様になり、牛飼いの醍醐味や可能性を自身の思いと重ね合わるきっかけが少しずつ芽生えてきました。初めて書き残したぼんやりとしたデザインも次第に色濃くなり、今自身がやるべき事が見え、幼い頃に抱いていた違和感や恐怖心が可能性に変貌しました。

牛は人間に合わせ急激に進化してきました。牛やそれを取りまく環境や人間も変化し続けてきたと思います。生産資材の高騰、農家戸数の減少、大量生産による牛や地域環境への配慮などなど、守ってはいとても追いつけないスピードです。6次産業にとて関心があります。佐渡ヶ島のどこかですてきな小さなお店やコミュニティが集めたコンパクトビレッジを想定しております。そのためにも6次産業の手前で根源でもある0次産業に力を入れ楽しんで酪農を続けます。

夢は海が望める山の中腹あたりでレモンとオリーブの畑にかこまれ牛がつくった緑の中でハイテクとともに生きていく事です。

畜産安心ブランド生産農場だより

佐渡市：株式会社 佐渡島黒ファーム

「佐渡島黒ファーム」は養豚が途絶えていた佐渡に復活した、島内で唯一の養豚農場です。繁殖から肥育まで一貫して行い、県内外レストラン、島内ホテル・旅館・学校給食等に販売しています。平成28年12月にクリーンポーク生産農場の認定を受けました。

当社は、六白黒豚と呼ばれるパークシャー種を島の南部で繁殖、国仲平野の海岸近くにある耕作放棄地に放牧で肥育後、出荷しています。放牧場は砂地で水はけが良く衛生的で、かつ豚の足に優しいこと、地下水の利用が可能なこと、また防風林で遮られているため人目につかないことで豚のストレスも少なくのびのびと育つことが出来ます。放牧後の堆肥のたっぷり入った農地は肥料を与えずとも野菜が良く育つため、複数の農地を放牧→野菜→放牧と循環させることで、豚にも作物にも優しい環境づくりをしています。

飼料も島内の野菜や果物、米粉や酒粕などの余った食材を出来るだけ利用しています。また排泄物は島内の堆肥センターで特殊肥料として生産して販売し、地域と密着した循環型農場を目指しています。

今後はモツ煮込やハンバーグなどの6次産業化に力を入れ、佐渡を訪れる方に気軽に「佐渡の島黒豚」を味わっていただきたいと同時に全国のレストランやホテルに佐渡の上質な脂を蓄えた豚肉を知っていただけたらと思っています。



平成30年度採用の正規職員を募集します。

当協会では、平成30年4月1日採用の正規職員を次のとおり募集しています。

詳細は、当協会ホームページ

(<http://niigata.lin.gr.jp>) をご覧ください。

- 1 募集人員 1名程度
- 2 採用職種 農業技術職員
- 3 応募資格 次のア及びイの条件を満たす者
ア 平成30年3月に学校教育法に定める大学（大学院を含む）を卒業（修了）見込みの者又は既に大学（大学院を含む）を卒業した平成5年4月2日以降に生まれた者
イ 理系学部学科を専攻した者



Facebookで情報発信しています！

当協会はFacebookページ「新潟ちくさん情報局 (<https://www.facebook.com/niichiku/>)」にて、皆様に情報を提供しています。

畜産業界の皆様向けの情報はもちろん、消費者の皆様にも楽しんでいただけるよう新潟県内の畜産グルメなど、様々な情報を発信していますので、皆様からの「いいね！」をお待ちしております。



編集後記



4月となり、新たな年度が始まりました。新入生や新社会人など、「新」が多くつく時期ですね。新しい事業として、4ページにPRRS対策の事業を紹介しております。近年、県内でもPEDや鳥インフルエンザが発生し、大きな経済的損失となりました。疾病の最も重要な対策は予防です。関係者の皆様には、こういった事業を活用していただき、一層の衛生管理に取り組んでいただければと思います。

また、本誌ではフレッシュな話題として、畜産安心ブランド生産農場の認定を受けた農業高校2校を特集しております。取材に伺った現場で、若い生徒さんたちが畜産に真摯に向き合い、生き生きと活動する姿はとても新鮮でした。動物たちもとても人に馴れていて、普段から愛情深く世話していることが良く伝わってきました。生徒さんたちの若い力が、今後どのように花開いていくのか楽しみです。
(荒井 記)